

後拾遺和歌集私注(5)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1986-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏木, 由夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1573

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



後拾遺和歌集私注 (5)

柏木由夫

加階まうしけるにたまはらで、鶯のなくをききてよ
みはべりける
清原元輔

22 うぐひすのなくねばかりぞきこえけるはるのいたらぬ
人のやどにも

【訳】 鶯の鳴く声だけは聞こえるよ。心楽しむ春が訪れてこない人の家までにも。

【校異】 よみはへりける↓㊟よめる はかりそ↓㊟はかりに きこえける↓㊟㊟㊟㊟きこゆなる やとにも↓㊟㊟㊟㊟㊟㊟やとはは

【他文献】 元輔集I 97 (詞書 かゝい申ゝを、えたまはらで、うぐひすのなきはべりしをきゝて 五句「人のものにも」、同集II 98 (詞書 かゝるまうしゝにえたまはらで、鶯の啼折に 四句「花のいたらぬ」、元真集23 (詞書 正月六日に鶯早ねをきゝてはらからに うぐひすのはつねばかりぞきこゆなる春のいたらぬところゝゝゝに)。

【注】 抄注、存疑なし。集抄—加階申ける—正月の叙位に位を申給はる事也。江次第に委。うぐひすのなくね—春のいたらぬとは、君の恩沢のあまねからぬ心也。我述懐の泪を鶯のなくにそへてなるべし。古今に「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ」とよめる詞也。

【語釈】 ^加階√位階の昇進。叙位。叙位については『延喜式』に「凡正月七日、賜宴於五位已上、若有叙五位以上者、前二日、大臣及参議以上、於御所拵定、应叙位一人、即令書位記仰之」とあり、正月二日(20)、三日(21)に続く後拾遺集の暦日進行重視の配列構成に合う。元輔の加階への関心は、

かゝるしはべりしとし、えしはべらで、雪のいたう
ふる日

うき世にはゆきかくれなむかきくもりふるは心のほかにもあるかな(元輔集I 113、同集II 114 詞書少異あり
二句「ゆきかくれなて」、四句「ふるは思ひの」)

にも示されている。

△鶯の鳴く音▽ 春到来に重なるものとの前提で詠まれている。

春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ
思ふ(古今 春上11 忠岑)

鶯の鳴く音を聞けば山ふかみ我よりさきに春はきにけり
(風雅 春上48 信明、新拾遺 雑上152)

集抄では述懐の涙を添えるところ、藤本一恵氏は「うぐひす」に「憂」を掛けるとする。しかし「憂」を掛詞とする場合は、

我のみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花と散り
なば(古今 恋五78 不知)

知られねば身をうぐひすのふり出でつつなきてこそゆ
け野にも山にも(蜻蛉日記 上巻)

のように「身を憂」の形をとり、「鶯」以外でも「忘らるる身をうぐ橋の中絶えて」(古今 恋五85 不知)とあるから、22は掛詞とする必要はないと思われる。

また、この句に述懐の涙が添えられているか否かは、年ごとに春を忘るる宿なれば鶯の音もよきてきこえず

(風雅 雑上1414 元輔、元輔集187 五句「わきてきこえず」、同集II 90)

では鶯と作者の境遇は対比するべきものと想定されてお

り、これと同想とすると、作者の悲しみを鶯の鳴き声に重ねることはできない。↓【評】参照。

△春のいたらぬ▽ 集抄の挙げるように、

春の色のいたりいたらぬ里はあらじさけるさかざる花
の見ゆらむ(古今 春下93 不知)

に基づくが、もともと

誰言春色從東到(和漢朗詠集 卷上 梅 萱三品)

とあるように、漢詩表現にあるものの直訳利用。「いたる」は「ある場所への到着」(日本国語大辞典)を意味し、この場合は「春」が擬人化されて「人の宿」に到達していない、との意を表す。「いたらぬ」は古今93も含めて、

わたつみの翁も花はかざしけり春のいたらぬ所なれば(六帖 第二「おきな」 1395)

かつ見れどうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば(古今 雑上880 貫之)

のように二重否定による強調が多い。22も形式的には異なるが、一首全体が倒置されていて、内容的には下句での打消しを逆接的に上句で受けとめていると言える。

△人の宿▽ 四句の連体修飾を受ける語であると同時に、「宿」は初句の「鶯」が訪れる所でもあることで、上句下句を連接している。

山深み人に知られぬ宿なればまだ鶯の訪れもせず(重

之子僧集4)

【評】 元輔集にはこのような望ましい官位を得られないことを嘆く述懐の歌が多い。しかし、多くは「つかさたまはらで：」（I 8、I 165、II 6）などのように、官職の得られない嘆きの場合で、加階への思いを歌うのは語釈に挙げた「うき世には」との二例ほどにすぎない。それでもなお加階を選んだのは、後拾遺集の暦日配列重視によるのだから。元輔集で鶯を詠みこんだ歌としては以下のものがある。

天徳二年正月十四日、少将よしちかが比叡にのぼりて侍しに、うぐひす心もとなき詠めと侍しに

鶯の音はうちとけで足引の山の雪こそしたきえにけり

(II 19)

山寺にまかりしを、ある人の法師になりたるなど申しかば、いひつかはしし

つれづれとながむる春の鶯はなぐさめてだに鳴かば鳴かなん (II 175)

つかさ給はらぬことを、前大式くにのりの朝臣、鶯のねにしらせむなどやうに詠みて侍し、返事に

春ごとになく鶯の音をしらでおほかたにのみ思ひけるかな (II 189)

これらは元輔集Iで詞書・歌詞に少異があるが—II 19はI

後拾遺和歌集私注(5)

3で二句が「はねうちとけて」とあるなど、22の解釈をする上で参考になる。特に鶯の鳴く音に作者の述懐の涙を読み取るべきかについて、語釈では「としごと」(I 87)を挙げ、そこでの鶯が明るい春の象徴として扱われている用法と共通すると述べたが、II 175・II 189では鶯の鳴くことに述懐の反映を読み取ることも可能かと思われる。前歌21との配列の流れは、暦日の進展のほか、「山里」から「人の宿」へと場を移し、21での「春」と「鶯の声」との共時的重なりを不一致な場合へと転じている。

俊綱朝臣のいへにて、春山里に人をたづぬといふころをよめる 藤原範永朝臣

23 たづねつるやどはかすみにうづもれてたにのうぐひすひとこゑぞする

【訳】 尋ねてやって来た家は霞につつま覆われて見えな
いが、谷から鶯が鳴き声を一声立てることよ。

【校異】 俊綱朝臣↓(㊦)俊綱の朝臣 春↓(㊦)春の たつぬ↓(㊦)たつぬる よめる↓(㊦)よみ侍ける

【他文献】 範永集15(詞書) はりまのかみのいへにて、春山ざと人のいへをたづぬるころを、袋草子上卷(雑

談) 範永朝臣歌には谷鶯一声ぞする染肝膽歌、以之彼

人為「第一秀歌」之由、年来心中所存也。而余人必モ不然之氣也。而或人語て曰、古老伝語云、範永云、我身今生秀歌ハ此歌也と称と云々。愚意忝通「彼意深所「自愛」也」、和歌一字抄卷之下（「尋」山家尋人）、明題和歌全集（春部上 838 「春山家尋人」）。

【注】抄注―此歌ノ終句ヒトコエゾナクトハヨマズンテ、ヒトコエゾスルトヨメル秀逸也。但古歌ニヤマホト、ギスヒトコエゾスルトヨメリ。友則が詠ナリ。集抄―心はあきらか也。石山にて直幹、白霧山深鳥一聲と作りし朗詠の傍にや。袋草子云、範永云我身今生秀歌ハ此歌也ト称云々。存疑なし。

【語釈】△俊綱朝臣のいへ▽ 俊綱は橋俊綱で、後拾遺集に四首の入集歌があるほか、伏見に豪奢な邸宅を構え、歌合・歌会を主催し、同時代歌人と幅広い交友を持った。「今鏡」藤波の上第四、「伏見の雪の朝」参照）23も伏見邸歌会の作と考えてよいだろう。

△たづねつる▽ 「訪問する」の意だが、本来的には「捜し求める」ことを前提にしている。

いかでかは尋ね来つらむ蓬生の人も通はぬ我が宿の道
（拾遺 雑賀1203 不知）

鶯の首をしるべにて霞立つみやまのうちを尋ねつるか
な（公任集8）

山里に今日しも人の尋ね来ば雪つもれとぞ待つべかり
ける（寛徳二年十月、天喜二年七月 左京大夫道雅障子絵合32範永）

右に例示したものと23を重ねると、23の作者―あるいは歌中での動作主―が山里の道を辿り辿り知人の邸を訪れる情景が髣髴とする。

△宿は霞にうづもれて▽ 「埋む」の意味は「土や雪に覆われて見えなくなる。また物に深く入りこんで見えなくなる。」（日本国語大辞典）とある。霞に埋もれるとは、

浅緑山は霞にうづもれてあるかなきかの身をいかにせ
ん（続後撰 雑上1036 好忠）

春立ちてほどやへぬらん信楽の山は霞にうづもれにけり（続後撰 春上44 重之）

のようにあるが、特に好忠詠で「あるかなきか」と続く点に注意される。霞以外でも、

山里はゆききの道の見えぬまで秋の木の葉にうづもれにけり（詞花 秋133 好忠）

うづもれてあるにもあらず年を経る宿と知りてや雪つもるらん（新千載 冬705 是則）

のように、道や宿が見えなくなる程の状態とされている。23も厚い霞に覆われているため、宿は視界に入らない程であることを示していると思われる。

〔谷の鶯〕 鶯は冬の間谷に籠っているとされ、19の語釈にも挙げたように「谷の古巢」（詞花 恋下259、同260）「古巢なる谷の鶯」（経信集14）などと詠まれている。だから「谷の鶯」とは

谷さむみいまだ巢立たぬ鶯の鳴く声わかみ人のすさめぬ（後撰 春上34 不知）

氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声（拾遺 春6 順）

のように、谷の古巢にまだとどまっている初春の、初音をあげる鶯であることを凝縮した表現だと言える。

△一声ぞする▽「一声」を詠まれるのは、主として、夏の夜の臥すかとすれば時鳥なく一声に明くるしのめ（古今 夏156 貫之）

のように、時鳥であり、23と同じく花だにもまだ咲かなくに鶯の鳴く一声を春と思はむ

（後撰 春上36 不知）

と、鶯の一声を歌うことは珍しい。また、一声は「鳴く」と表現するものがほとんどで、抄注に引用する友則の歌は出典不明。まれなものとして、

夏草は茂りにけれど郭公など我が宿に一声もせぬ（新古今 夏189 延喜御製）

を見出し得たのみである。「鳴く」でなく、「する」とし

たことに抄注は注意し、「秀逸也」とする。前者は鶯の側からの表現であるのに、後者は客観的な位置、あるいは作者の位置からのものであって、抄注はそうした点を考慮して後者を良しとしたのだと考えられる。

【評】 題は「春山里に人を尋ぬ」とあるが、歌の内容は、山道を登り到達した知人の邸を埋めるばかりの深い霞と、その中に一声印象深く聞こえる鶯の声がする、という山里の視覚・聴覚にわたる情景そのものである。したがって初句を除けば、霞の中の鶯の声を詠んだ作とのみ解することも可能となる。霞の中の鶯は、類型化された詠法として多くの作品がある。一端を以下に示すと

たが里の春のたよりに鶯の霞にとづる宿をとふらん（千載 雑上962 紫式部）

花咲かぬときはの山の鶯は霞を見てや春を知るらむ（新千載 春上26 能宣）

おぼつかないづこなるらむ花咲かぬ霞のうちの鶯の声（新千載 春上27 公任）

山里は春の霞にとぢられてすみかまどへる鶯ぞ鳴く（興風集122）

などがある。これらはすべて霞の中で鶯が鳴いている情景を前提にして、それへの作者の疑問を述べたり、擬人化された鶯の心を推測したりしている。ほかにも霞と鶯のう

一方が欠けていることから詠み出された歌なども多くあるが、それらも含めて、この両者の結びつきの強さが詠作のきつかけとなつていたのである。それは23でも同様なのが、23の場合はそうした伝統的題材の結び付きを、偶々重なつたこととして並べたのみに言いとどめたところに特色がある。つまり、右に掲げた中で興風詠と比較すると、どちらも上句下句に霞と鶯を分けて配するが、興風詠での三句は上句に対して独立した趣を持つていて、一方23での四句以下は上句に対して強く結びつけており、一方23での四句以下は上句に対して独立した趣を持つていて、要するに23は情景内の因果関係を考へるといふ追求へは向かわず、情景そのものの客観的な提示のみにとどめようとして見られるのである。その意味から、抄注が歌末を「する」とした点に注意したのは、この23の詠作方法上に一貫性を認め、て評価したのだと思われる。

しかし、だからと言つて無秩序な現実の自然の有り方を、そのままかまわず描写してゐるのではない。提示された情景を含めた一首全体で作者の主張は表されている。初句には作者の労苦と都の喧噪を離れた郊外の山里の位置が示され、二句以下では辿り着いた宿をすっぽり包み込む霞と、霞の底の谷から聞こえた鶯の声を「一声」とすること、印象深さを鮮明にしているのである。このように焦点が明確に定まつた巧みな情景描写の構成によつて、感動の対

象が示されていると言へるだろう。

一方、集抄で挙げるように「白霧山深鳥一声」（和漢朗詠集 行旅 直幹）がこの歌の背景にあると想定して良いだろう。「和漢朗詠集」には他にも「咽霧山鶯啼尚少」（鶯 元稹）、「谷静 纔聞山鳥語」（猿 江相公）など、23の情景や情趣に近いものを見い出せる。つまり23は漢詩的情趣を持つた作品と見なせると思われるのである。近い時期の漢詩作品の中には次のような表現も見える。

①……霞間鶯語曲猶新……（康平三年1060二月某日於世尊寺即事五首のうち 菅原在良）

②一尋勝地洛陽東……鶯隔尽堂歛薄霧……（寛治二年1088三月十三日遊長樂寺即事十七首 藤原基綱）

③東山有寺在雲端……谿閑啼鳥隔窓語……（嘉保三年1096三月一日遊双輪寺八首 藤原基俊）

④尋来山寺有何思……鳥声日暮嶺霞中……（年次不明 藤原忠通）

これらは「本朝無題詩」（①③④）と「中右記部類紙背漢詩集」（①②③）に載るものから適宜抜き出したものであるが、どの詩も喧噪の俗界から離れ、郊外の山寺に遊んでその幽寂な自然に身を委ねて心を解放しようとするものである。23の場合もこれら漢詩と同様の境地を歌おうとするものではないかと考へる。配列上では前後の22・24のどち

らもが日常生活での俗的世界を詠むのに、対立するものを置くことで、変化を生んでいる。

小野宮太政大臣家に子曰しはべりけるによみはべりける
清原元輔

24 ちとせへむやどのねのひのまつをこそほかのためしに
ひかんとすらめ

【訳】 千年も栄えると思われる家でのめでたい子の日の松だからこそ、格別に他の家々があやかると例として引こうとするのだろう。

【校異】 小野宮太政大臣家↓(因)(團)(神)(團)小野宮太政大臣の家 ちとせつむ↓底本以外、元輔集を含めてすべて「ちとせへむ」とあるため、底本の誤写と判断して*に示したように校訂する。ほか↓(妙)よそ

【他文献】 元輔集I 33 (詞書) をのゝみやの太政大臣ねの日しはべりしに 初句「ちとせへむ」四句「ほかもためしに」、同集II 28 (詞書) をのゝ宮の家に、子曰し侍しに、初句「ちとせへん」四句「ほかもためしも」。

【注】 抄注、存疑なし。集抄・清慎公の御家を千とせふる所におとしつけて、此宿の松を外のためしにもひかんと也。松ひく縁也。

【語釈】 △子曰▽ 正月初の子の日に野に出て小松を根ごと引き抜き、長寿を祈る行事。しかし、実際には新年の初子の日に限らず、二月に行った場合も少なくない。

△ちとせへむ▽ 底本では「ちとせつむ」とあるが、校異に記したように改めた。また「つ」と「へ」の草体はきわめて紛らわしく、実際の和歌の例では、「ちとせつむ」は「若菜」につづくことが多い。「ちとせへむ」、または「ちとせふる」は圧倒的に「松」につづくことが多く、ほかに「鶴」や「君」などがあるが、長寿を祈る賀の歌が典型的な用法だろう。

ちとせへん君しいまさばすべらぎの天の下こそうしろ
やすけれ(拾遺 雑賀1173 元輔)

ちとせ経る常盤の松もあまたび君が御代には生ひか
はりなん(新千載 慶賀295 道濟)

「千年」は
浅緑けふひきそふる松をこそ千とせの春のはじめとは
見れ(元輔集I 41)

のように、子の日の松のめでたさが保証するとするのは一般的である。とすれば24の「千年経む」が連体修飾でかかるのは「宿の子日の松」であることになる。しかし、これでは「宿」のめでたさを祝うことにならない。やはり「千年へむ」は直接「宿」にかかると思われるべきで、前掲の「ち

とせへん君しいまさは……」の「君」が「宿」に置き換わったと見るべきだろう。つまり、子の日の松は、それだけで繁栄の続くめでたさを意味するが、その松が「千年へむ宿」のものであるため、一層のすばらしさを示すのだというのである。

△宿の子日の松▽ 「宿」は実頼邸。通常小松は野辺に出て引くものである。

姫小松多かる野辺に子日して千代を心にまかせつるかな（金葉 三奏本 夏27 道濟）
しかし、

子日する野辺ならねども我が宿の松も千とせの松にや
はあらぬ（統後拾遺 賀612 朝忠）

と、右の例では「我が宿」の松が野辺のそれに劣らないと主張されている。「宿」を一層強調した場合、子の日の詠ではないが、次のように歌われることもある。

我が宿に咲きみちにけり桜花ほかには春もあらじとぞ
思ふ（後拾遺 春上126 道濟）

「我が宿」と「ほか」を対比して、前者が春を独占するという。この手法は、「宿」以外で、

子日する御垣のうちの小松原千代をばほかの物とやは
みる（新古今 賀728 経信）

でも共通する。皇居の御垣の原と「ほか」との対比が前提

にあり、その上で前者が「千代」を独占すると歌っている。24でも「宿」と「ほか」とは対比的にとらえられており、その点で道濟や経信の詠に一致している。しかし、前者がめでたさを独占するのではなく、後者にそれが及び広まる点が予想されている点で異なる。

△ほかのためしに引かん▽ 「ほか」は①他の事、②他の家、の両様に考え得る。①により、他の様々なこともすべて永続・繁栄するための先例として松を引き抜く、とも考え得るわけであるが、前述のように「宿」は「ほか」と対比的内容を示すと解されるので、②によるべきだろう。つまり、実頼邸以外の家々にとつての良い手本——実頼邸の繁栄と同じ繁栄を得ることができる——として、松を引き抜く、となろう。「ためし」は

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君
に始めむ（古今 賀353 素性）

みな人のいかでと思ふよろづ世のためしと君を祈る今
日かな（新勅撰 賀454 公忠）

のように、直前の語の内容を保証する「証拠・しるし」と解される語構成をとることが多い。24の「ほかのためし」は「みな人の……」の歌の二・三句が省略され、「みな人のためし」となった場合と考えれば良いのではないだろうか。なお「引く」には松を引き抜くという意味以外に、

よろづ代のためしに君が引かるれば子日の松もうらや
みやせん（金葉 三奏本 春23 赤染衛門）

のように、例証として挙げられる、との意を表すこともある。24の下旬をそうした意にとつて「他の家の繁栄の例証に挙げようとするのだから」と解することは可能である。だがそうした場合、上句と合わせて一首として主張しようとするのが不明になってしまう。したがって、この解釈は無理とすべきだろう。また、元輔集Iの「ほかもためにひかんとすらめ」の場合、「引く」主体は「他家の者」となる。

【評】 子の日の行事について、『史料綜覧』によって平安時代の部分を見ると、その儀式・遊宴は寛平八年から応徳元年までで十四箇所ある。そのうち、正月の初子と思われるのは五回ほどで、他は正月の下旬、閏正月、二月に散っている。したがって、後拾遺でこの位置に子の日の詠を配したのは、現実の子の日の催しより、観念的な年中行事の進行に従っていることになる。

元輔集で実頼関係の和歌は、実頼七十賀の屏風歌のほか、六首を挙げられる。うち二首が子の日の詠で、他の四首は実頼主催の歌合詠と花見の遊宴の折のものである。後者の一例を挙げると、

小野の宮のおとどの家の、池のほとりの桜の花惜し

む心を詠みて侍る

桜花そこなる影ぞ惜しまるる沈める人の春かと思へば
（Ⅱ7、Ⅰ9 詞書少異あり 二句「そこなるかけに」）

とあるが、下旬の述懐性に注意される。つまり、このような元輔の沈倫の思いをも直接訴えられ、受け取るほどの間柄だったと考えられる。

元輔集には子の日の歌が二十六首見られる。それは同集が日常生活詠を多く含むことの反映であり、内容的には祝意を表し、長寿を祈るものだが、中には、

年頃、官えたまはらぬに、子日しに人の率ていで侍
りしに

谷深み沈むためしにひかれつつおいぬる松は人も手ふ
れず（Ⅰ175、Ⅱ125 上句「たにふかくしつむたとひに
ひかされて」）

のように、めでたさに反する我が身への思いが漏れ出ているものもある。24は実頼家と他の家々の繁栄を予祝するが、「ほかのためし」には、そうした元輔の不遇からの脱出願望もこめられていると読み取るべきだろう。

前歌からの配列構成としては、鶯の歌群から、子の日の歌群に移ったことになる。しかし、22から三首に「宿」を歌語に持つ歌を配することで、進行を円滑にしている。

題不知

和泉式部

25 ひきつれてけふはねのひのまつにまたいまちとせをぞ野べにいでつる

ねつつ(道命集23)

能宣詠では「小松を引く」と「引き連れて帰る」とが明瞭な掛詞になっている。道命詠は五句の「峰」に「(松の)根」が掛かっているが、初二句が25にほぼ一致する。子の日の詠としては常套的な技巧と言えるだろう。

【訳】 小松を引き抜くために人々を従わせて、今日の子の日だから、その小松で例年どおり新たにもう千年の寿命を延ばそうと、野辺に出たのですよ。

【校異】 まつにまた↓[●]松にたに

【他文献】 和泉式部集13、同集IV2(詞書 子日を五句「野へに出ける」)

【注】 抄注、存疑なし。集抄一千とせの上に今千年をのべんとそへたり。

【語釈】 へひきつれて√「人々を従わせ伴う」ことが表の意味だが、「引き」に「小松を引き抜く」の意味が掛けられている。それは子の日に野辺に出る場合、春立ちて子日になればうち群れていづれの人か野辺に

来ざらん(貫之集135)

とあるように、多くの人々が連れ立って行くことが慣習としてあるために、一般化した用法であろう。

子日する野辺に小松を引きつれて帰る山路に鶯ぞ鳴く(玉葉 春上12 能宣)

引きつれて今日は子日をしつるかな松の尾山の峰を尋

へひきつれて√ 今日が祝うべき子の日であることを格別意識した表現で、『和泉式部集全釈』では「先日はゝの為に、今日はそれとちがってゝの為に」と説き、若菜摘みをした先日との区別を示すとされる。しかし、右の道命の詠や、

知るらめや今日の子日の姫小松おひむ末まで栄ゆべしとは(新古今集 神祇1852)

今日も今日子日の松は引きつれどまだねを見ぬぞかひなかりける(道命集238)

のように、子の日を「今日」と特に取り上げるにしても、具体的に区別される他の日を想定しない場合は多い。「評」で触れるが、「今日」という表現には「子日」の強調以外に、音調の良さから使われた面が多分にあるのではないだろうか。

へいまちとせ√ もう千年。「いま」は「さらに」、その上に「の意の副詞。前述のように『全釈』では「既にこの野べでは、若菜摘みをして、一度延命をしたことがあるのだ

が」の意が含まれ、それへ今日の子の日に千年を加えると解している。しかし、次のように詠まれる子の日の歌もある。

藤さきの軒の巖に生ふる松いまいく千世か子日すぐさ
ん(元輔集Ⅱ261)

この歌では、通常の小松なら子の日の日に引くことで千年を約束するが、朽ちることもなさそうな巖に生えた松だから、毎年子の日を過ごしても、何千年つづくかわからないほどであると歌っているのである。「いまいく千世」とは毎年の子の日に約束される千年が繰り返されて、さらに何千年にもなることを言っている。こうした子の日の歌の方法からすれば、25の「いまちとせ」も子の日が毎年くることで重なり増す千年を意味していると解するのでよいのではないかと思うのである。

△野辺に出でつる▽野辺に「延べ」が掛けられている。子の日の歌での技法としては、格別珍しいものではなく、

いにしへのためしを聞けば八千代まで命をのべの小松
なりけり(後拾遺「異本歌」1227 不知)

万代をのべにと聞きし松なれば千代の根差しのことに
も有るかな(円融院御集59)

などの例を挙げられる。

【評】 25は「和泉式部集」冒頭に配された百首歌の第三

首に当たる。第二首は

春日野は雪降りつむと見しかども生ひたる物は若菜な
りけり(後拾遺 春上35)

である。『全釈』が25の解釈で、若菜摘みによる延寿が言外にあるとするのは「式部集」の配列に照らせば、説得力は増し、また同百首歌の成立事情を推測する手掛かりともなり得る。しかし、後拾遺集の子の日の歌群中に置き、独立した子の日の歌として見た場合は、語釈に述べたように、若菜をも引き合いに出すことなく解釈し得るように思われる。

この歌は子の日の歌として内容的に特に注目すべきところはない。むしろ技巧的な面での工夫に作者の意は注がれているように思う。まず掛詞は「ひきつれて」と「のべ」の二箇所にある。それらは子の日の歌の技巧として一般的なものだが、あえて両者ともに用いたところに、作者の意識的なものが感じられる。しかし、こうした掛詞以上に注意されるのは「…まつにまたいま…」の「ま」音の繰り返しである。もちろん松・また・今の各語の意味内容が一首内で必要とされることから選ばれた各語であるが、それだけで同音の繰り返しは偶々生じたというのではないだろう。作者の意識的な韻律への配慮があったと見なすべきではないだろうか。また「今日は」と「いま」も音はまったく

く異なるが、意味上で類似した語を繰り返すことが一首にリズムを与えていると思われる。

和泉式部の和歌での表現面での特色の一つに重語表現がある。岸本良子氏（『和泉式部の歌について——重語表現を中心に——』学大國文 第14号 昭和46年）によれば、和泉式部の和歌一三五七首を集成したうち二四八首、約一八パーセントに重語表現が見られるという。またそれらがもたらす効果を十項目に分け例証されている。とくに心中の低迷状態を表すものは和泉式部独特のものとし、

経ればうし経じとてもまたいかげせむあめの下よりは
かのなければ（五八四）

とどめおきて誰をあはれと思ひけん子はまさるらん子
はまさりけり（四八五）——歌番号は岩波文庫による
などを挙げる。前者は「経る」ことを肯定も否定もしたが、
我が心の有り様について、重語表現で示し、後者では、
親の子への愛情を繰り返す形だが、亡き娘（小式部内侍）
の遺児への思いを推量することから、その亡き娘への作者
の親としての哀惜の思いをかみしめる境地を導びている。
たしかにこの両例とも重語表現が作者の心の深部をも
つとも生々しく表し得ていると言えるだろう。ほかには、
リズム感を助長する効果のあるもの、動作・状態の激しさを
強調する効果のあるもの、なども述べられている。

こうした重語表現に25の同音や類義語の繰り返しは、直接にはないにしても結びつく技法ではないだろうか。和泉式部の和歌について「口にまかせたること」と見える点があるとされる。それは作者の心がおのずと口から出たまで和歌としての表現になっているという感を読む者に抱かせる音調の良さにも依っているだろう。それは様々な方法・形式はあるにしても、繰り返し表現がもたらすものとも考え得る。その表現にこめられた作者の心の内に深淺はあるにしても、和泉式部には本来的に語の意味や音そのものへの繊細鋭敏な感覚とこだわりや好みがあると思う。そして、時にそうした表現の中に作者の心の深い沈潜を読み取り得るのではないだろうか。

付記 本稿は「大妻女子大学文学部紀要」第十七号に掲載したものの続稿である。